『易本義』卦變圖」攷

花崎隆一郎

序言

朱子「易本義」（以下、單に「本義」とのみ略記する）[1]の卷首に掲げる「卦變圖」（本稿末尾に付す）の李挺之「六十四卦相生圖」（以下、單に「相生圖」とのみ略記する）[2]に依據せることは、先儒のしばしば觸れるところである。[3]その構成は「相生圖」の組織上の基本たる六消息卦を虞翻の舊に復して十消息卦とし、乾・坤二卦を除く周易六十二卦の倍數たる一百二十四卦に敷衍したものである。ただその間「相生圖」に見られた論理的矛盾を整頓してはいるものの根本的差異を認めることはできない。從って逆說的には、『本義』卦變圖」（以下、單に「卦變圖」とのみ略記する）を收縮してゆけば自ずと「相生圖」に溯源できるものといえよう。然らば「卦變圖」は「相生圖」の亞流として、從って荀爽・虞翻以來の傳統的卦變の論理[4]を以て論ぜられるべき性質のものである。

本稿では、この間の事情とその意義を能う限り簡明に記し、更に「『本義』卦變說」もまたその殆どが「相生圖」の延長線上において理解されるべきであることにまで觸れたい。

なお、「卦變圖」を朱子の自作とせず朱門後繼の徒の作なりと考え、從って「本義」と「卦變圖」との成立時期に相當の距離を設ける說があるが、[5]本稿では「卦變圖」をば、たとえ朱門後學の作であるとしてもなお先師の意思を表現したものと見、「本義」と「卦變圖」とを併行して論ずることとする。

一　構成について

「卦變圖」は先ず復䷗・姤䷫（一陰一陽之卦）、臨䷒・遯䷠（二陰二陽之卦）、泰䷊・否䷋（三陰三陽之卦）、大壯䷡・觀䷓（四陰四陽之卦）、夬䷪・剝䷖（五陰五陽之卦）の十消息卦を基本に置く（以下、これら十消息を「本卦」と稱する）。即ち十卦を以て他の一百一十四卦を統括するのである。而してこれら十卦をも含めて一卦は必ず再出する。從って一卦生成の由來を乾・坤の兩體より說くのである。これを一陽之卦に例えれば、坤體に乾の一爻が初に交わって本卦復䷗となり、二に交わって師䷆、三に交わって謙䷎、四に交わって豫䷏、五に交わって比䷇、上に交わって剝䷖となる。これら六卦はまた五陰之卦でもある。即ち、乾體に坤の五爻が初二三四五に交わって本卦剝となり、初二三四上に交わって比、初二三五上に交わった卦でもある。その次序を示せば、乾體に坤の五爻が初二三四交わった卦でもある。

交わって豫、初二四五上に交わって謙、初三四五上に交わって師、二三四五上に交わって復、となる。然らば復を本卦とする一陽之卦は、反轉すれば剝を本卦とする五陰之卦となる。[6] 斯様な構成による「卦變圖」においては前記の如く必然的に一卦は再出することとなる。このことは二陽・二陰・三陽それぞれの卦においても同様であり、反轉すれば四陰・四陽・三陰それぞれの卦となる。「卦變圖」の「一陰一陽之卦」の條に「五陰五陽、卦同圖異」と注し、「二陰二陽之卦」の條に「四陰四陽、卦同圖異」と注するのはこの意である。[7] 而してこれらのことを結論的にいえば、「卦變圖」は縦には反卦、横には對卦の關係により構成されていることとなる。これを整理して圖示すれば上のようになる（圖は本卦を以て例示する）。[8]

縦の關係（反轉）反卦	一陽之卦↔五陰之卦 復䷗↔剝䷖	二陽之卦↔四陰之卦 臨䷒↔觀䷓	三陽之卦↔三陰之卦 否䷋↔泰䷊
横の關係（相對）對卦	↔	↔	↔
縦の關係（反轉）反卦	姤䷫↔夬䷪ 一陰之卦↔五陽之卦	遯䷠↔大壯䷡ 二陰之卦↔四陽之卦	泰䷊↔否䷋ 三陰之卦↔三陽之卦

（補注）雜卦傳に「否・泰反其類也」とあるように、三陽之卦否と三陰之卦泰とは反卦・對卦ともに同じく相反する卦形となる。

次に考慮されるべきは、「卦變圖」もまた「相生圖」と同じく「變」とともに「復」の論理を以て構成されていることである。「復」とは本卦に本づく爻變の一形式が更改される毎に本卦に復り、復び新たなる形式の爻變に移ることである。[9] 例えば、訟は遯の第一（本卦より始めて變ずる卦であるがために「第一復」とは稱さない）初變の卦であるとともに、大壯の第九復初變（この第九復は訟の一卦のみであるがために「初變」の語を省略して、單に「第九復」と稱するだけでもよい）の卦でもある。又、晉は臨の第四復再變の卦であるとともに、觀の第一初變の卦でもある。これらは「相生圖」が一卦は一本卦に由來するのとは異なり、一卦は必ず二本卦に由來するがためであって、「卦變圖」の乾・坤兩體に本づいていることをより鮮明に證明することでもある。

つづいて注意されるべきは、序言にも觸れた如く「卦變圖」が「相生圖」の論理的矛盾を整頓し、然かあるべき姿を以て構成されていることである。而して「相生圖」の矛盾とその整理とについては既に注(2)の拙稿に詳述しておいた。從ってここでは該當部分についてのみ簡單に兩圖の對比表を示し、「卦變圖」が「相生圖」のいかなる點に矛盾を認め、その矛盾をいかに整頓しているのかについて窺っておくにとどめる。

相生圖

本卦　臨䷒

第三復　小過䷽　萃䷬　觀䷓
三變　四三　五四　上五
交變

第四復　蹇䷦　晉䷢
二變　五三　上四
交變

第五復　艮䷳
一變　上三
交變

四陰二陽之卦

本卦　遯䷠

第三復　中孚䷼　大畜䷙　大壯䷡
三變　四三　五四　上五
交變

第四復　睽䷥　需䷄
二變　五三　上四
交變

第五復　兌䷹
一變　上三
交變

四陽二陰之卦

卦變圖

坤體に本づく本卦　臨䷒

第三復　小過䷽　蹇䷦　艮䷳
三變　四三　五三　上三
交變

第四復　萃䷬　晉䷢
二變　五四　上四
交變

第五復　觀䷓
一變　上五
交變

二陽之卦

乾體に本づく本卦　遯䷠

第三復　中孚䷼　睽䷥　兌䷹
三變　四三　五三　上三
交變

第四復　大畜䷙　需䷄
二變　五四　上四
交變

第五復　大壯䷡
一變　上五
交變

二陰之卦

乾體に本づく本卦　觀䷓

第一　晉䷢　萃䷬
二變　五三二初　上三二初
交變

第二復　艮䷳　蹇䷦
二變　五四二初　上四二初
交變

第三復　小過䷽
一變　上五二初
交變

四陰之卦

坤體に本づく本卦　大壯䷡

第一　需䷄　大畜䷙
二變　五三二初　上三二初
交變

第二復　兌䷹　睽䷥
二變　五四二初　上四二初
交變

第三復　中孚䷼
一變　上五二初
交變

四陽之卦

表のみかた

㋑「相生圖」と「卦變圖」とでは卦の排列の次序が逆方向である（前者は上から下へ、後者は下から上へと排列する）。右の表では統一の必要上、前者に従った。

㋺ 剛爻の右に付した○、柔爻の右に付した●は、本卦を基礎とした爻變を示す。

㋩「卦變圖」に示した「第○復　○變」は「相生圖」に倣ったもので、「卦變圖」そのものには記されていない。

㋥「爻變」欄の爻位を示す文字の横に付した＝は、「相生圖」での爻變の基礎（次序正しく不動であるべき變爻の爻位）の錯亂を示したものであり、▮は正しく整頓された「卦變圖」での爻變の基礎を示したものである。

右の表を要するに「相生圖」における下爻の爻變の基礎の錯亂に矛盾を認め、その錯亂を次序正しく整頓したのが「卦變圖」であるということになる。因みにいえば「卦變圖」下段の爻變の基礎も、整頓された中段の逆であるがために自ずと次序正しきものとなっている。

二　意義について

「彖傳或いは卦變を以て說をなす。今この圖を作り以てこれを明らかにす。蓋し易中の一義にして、畫卦作易の本指にあらざるなり。」とは「卦變圖」冒頭の文であるが、それは卦變の論が發生的にみて後發のものであり、[10] 經傳解釋の副次的意義をもつにすぎないことを表明したことばである。從ってその次序整然と排列された「卦變圖」を以てしてもそれによって限なく彖傳を解し、延いては經文にまでその解釋を波及させることは不可能であるとの認識が前提として措定されていることになる。事實、清儒王懋竑（注(5)を參照）を俟つまでもなく、既に朱子再傳の元儒胡一桂（字は庭芳、號は雙湖、婺源の人。一三世紀元初の人）は「本義」卦變說十九條と「卦變圖」とを照合した際、合致するのは訟・晉二卦のみで外餘はすべて不合であることを指摘している。[11] 然らば「卦變圖」はその卦變說と背馳した無用の圖であるのかという疑問が生じてくる。この疑問の解明は圖と說との對比商量をば兩者の特徵について、胡・王二氏より更に綿密かつ柔軟に行うことによって可能である。而して圖の特徵は、乾・坤兩體を基礎とした一卦再出の理と、「變」と「復」との論理に根據を置くこと、との二點であり、又、卦變說のそれは、彖傳に說く「剛柔の上下・往來（剛爻と柔爻との上り下り・往き來）」を解釋すること、にあった。[12] これら特徵の一致こそが兩者の合不合を決する關鍵である。

さてこの意味において、乾體に本づく遯より生ずる訟卦、觀より生ずる晉卦について圖は說と合致すると考える胡・王二氏の指摘は至當である。それはもし坤體に本づく大壯を訟の本卦とし、臨を晉の本卦とすれば、彖傳を解し得ぬがためである。[13] 然るに外餘の不合とされる卦についても斯樣な對比商量を行えば多くの合致する卦を見出すのである。今、卦變說十九條のそれぞれの卦を由來の卦とともに擧げ、これを「卦變圖」の場合と對比させ、併せて卦變說もまた「相生圖」の延長線上において理解されるべきであることの傍證とする。

卦變說・卦變圖・相生圖　對比表

卦變說			卦變圖		
卦	由來の卦		坤體に本づく卦	乾體に本づく卦	
			由來の卦	由來の卦	本卦
訟䷅	遯䷠	合	巽䷸	遯䷠	遯䷠
泰䷊	歸妹䷵	合		歸妹䷵	否䷋
否䷋	漸䷴	合	漸䷴		否䷋
隨䷐	困䷮	合			
	噬嗑䷔			噬嗑䷔	
	未濟䷿				
蠱䷑	賁䷕	合			
	井䷯		井䷯		
	既濟䷾				
噬嗑䷔	益䷩	合	隨䷐		
賁䷕	損䷨	合			
	既濟䷾		既濟䷾		
无妄䷘	訟䷅	×	家人䷤		
大畜䷙	需䷄	合	需䷄		

相生圖			
坤體に本づく卦			
由來の卦	本卦		
遯	遯		
坤三交而爲泰			
噬嗑			
否			
乾三交而爲否			
井			
泰			
益			
否			
既濟			
泰			
遯			
遯			
中孚			
遯			

合	咸䷞	旅▮䷷	泰䷊	旅▮䷷	否䷋	
×	恆䷟	豐䷶	泰䷊		否䷋	泰
合	晉䷢	觀▮䷓	臨䷒	觀▮䷓	觀▮䷓	泰
合	睽䷥	離䷝ 中孚▮䷼ 家人䷤	兌䷹	大壯䷡	中孚▮䷼	遯䷠
合	蹇䷦	小過▮䷽	小過▮䷽	臨䷒	艮䷳	觀䷓
合	解䷧	升▮䷭	升▮䷭	臨䷒		觀䷓
合	升䷭	解▮䷧		臨䷒	解▮䷧	觀䷓
合	鼎䷱	巽▮䷸	大過䷛	大壯䷡	巽▮䷸	遯䷠
合	漸䷴	渙䷺ 旅▮䷷	旅▮䷷	泰䷊	否▮䷋	否䷋
×	渙䷺	漸䷴		泰䷊		否䷋

		泰	臨	臨	臨	
		泰	臨	臨	臨	
旅	遯		臨	臨	臨	
否	遯					
		塞		升		
			臨	臨		
巽	遯					
否	否					
否	否					

表のみかた

㋑ 「卦變說」と「卦變圖」とを照合して、由來の卦の合致するものには卦名の右に▮を付した。なお本卦がそのまま由來の卦となる訟・晉二卦には本卦の右にも▮を付した。

㋺ その結果、兩者合致する卦には㊀印を、合致しない卦には×印を欄外に付した。

㋩ 由來の卦の空欄は、第二復以下の初變の卦で前に由來の卦を見出すことができず、本卦そのものに由來すると判斷できるものを示す。

㋥ 煩雜を避けるため「相生圖」欄には、本卦名と由來の卦名とのみを記すにとどめたが、上欄の說・圖に合致するものは卦名を○で圍んだ。これにより說もまた「相生圖」の延長であることが理解できる。

右の表の如くみるとき、卦變說十九條十九卦の由來とする二十七卦のうちいずれか一卦をとれば、十九卦中十六卦までが合致していることとなり、合致するのは訟・晉二卦のみとする胡・王二氏の指摘は虛妄となる。かりにこの拙考が可とせられるならば、經傳解釋の副次的意義をもつにすぎぬとされる「卦變圖」の價値は決して輕視できぬものとなる。

思うに卦變說十九條は、前記の如く彖傳に說く「剛柔の上下・往來」を解釋するがための論理的根據であるが、周易六十四卦中にはこの十九條十九卦以外にもなお多くのそれに類する語を說く彖傳がある。たとえば、「本義」が卦體を以て說く需・家人・損・益・歸妹・節などの卦の彖傳がその典型であるが[14]、他の殆どの卦の彖傳もそれに準じて說かれている。このことにより論者が試みに圖と彖傳とを照合したところ乾・坤ならびに强いて卦變を以て解する要を認めぬ頤・革・震・豐の都合六卦を除いた五十八卦のうち五十五卦までが合致し、合致しないのは无妄・恆・渙の三卦のみという結果を得た。而してこの三卦にはすでに卦變說があり、これを用うれば五十八卦のすべてが說と圖とに據る彖傳の解釋が可能となる。今煩を厭わず、說なくして圖のみに據る彖傳解釋の可能な卦の數例を示しておく。

卦變說十九條以外で、圖のみに據り彖傳を解釋できる卦の例（圖と合致すると認め得る由來の卦には右横に▬を付した）

卦	彖傳のことば	卦變圖				「卦變圖」に據る彖傳の解釋法
		坤體に本づく卦		乾體に本づく卦		
		由來の卦	本卦	由來の卦	本卦	
需䷄	需は、孚あり、光いに亨る、貞しければ吉なりとは、天位に位して、以て正中なればなり。	大壯䷡▬	大壯䷡	大畜䷙	遯䷠	「天位に位して正中」を得るのは、大畜の六五と上九との交換とも考えられるが、むしろ大壯の九四と六五との交換と見るべきである。
損䷨	損は、下を損して上を益す。その道上り行く。……剛を損して柔を益すこと時あり。	節䷻▬	泰䷊		否䷋	節の九五と上六との交換と見る。卽ち、下（下爻たる九五）の剛爻を損して上（上爻たる上六）に益すものと考えるのである。
大有䷍	大有は、柔尊位を得、大中にして上下これに應ずるを、大有と曰う。	夬䷪	夬䷪	小畜䷈▬	姤䷫	柔爻が尊位を得、上下の五陽爻がこれに應ずる。その六五が尊位を「得」たり、上下の五陽爻に「應」じられたりするのは、夬の九五と上六との交換とも考えられるが、むしろ小畜の六四と九五との交換と見るべきである。
困䷮	困は、剛揜わるるなり。……貞し、大人は吉なりとは、剛中なるを以てなり。		泰䷊	未濟䷿▬	否䷋	剛爻（大人）が柔爻（小人）に揜われていても、九五と九二の如き大人には吉。九五の大人は未濟の六五と上九との交換と見る。

右の如く考えるとき、圖の意義と價値は更に增大することとなり、さればこそ「卦變圖」として他の八圖とともに「本義」の卷首に掲げられたものと思われる。次に本節の結論を表として示しておく。

A　彖傳を解釋するのに强いて卦變を必要としない卦（六卦）

乾・坤・頤・革・震・豐

B　卦變說としてある卦（十九卦）

訟・泰・否・隨・蠱・噬嗑・賁・无妄・大畜・咸・恆・晉・睽・蹇・解・升・鼎・漸・渙

a　內「卦變圖」と合致しない卦（三卦）

无妄・恆・渙

b　內「卦變圖」と合致する卦（十六卦）

a以外の卦

C　卦變說にはないが「卦變圖」のみに據り彖傳を解釋できる卦（三十九卦）

屯・蒙・需・師・比・小畜・履・同人・大有・謙・豫・臨・觀・剝・復・大過・坎・離・遯・大壯・明夷・家人・損・益・夬・姤・萃・困・井・艮・歸妹・旅・巽・兌・節・中孚・小過・既濟・未濟

結　語

黃宗羲はその著「易學象數論」において李挺之「變卦反對圖」については卦變の眞を得たるものと稱するのではあるが、その「六十四卦相生圖」について主變の卦（本卦）の兩爻動くを難じ彖傳に適從せずとしてこれを排している。然らば、本卦五爻の變動にまで及び一百二十四卦に至る「本義」の「卦變圖」を「蓋し已にその煩わしきにたえず。……その一に從えば則ち必ずその一を舍つ。彖傳を以てこれを附會するも、一の合うものあれば必ず一の合わざるものあり。[15]」と評し、煩瑣にして附會のための圖なりと貶するのも勢いの然らしむるところである。

蓋し、二　の冒頭に記した如く、卦變の論は發生的にみて後發のものであり、經傳解釋の副次的意義をもつにすぎない。然らばそこに牽强附會の解釋をなされる可能性が無限に藏されているのも、これまた自然の勢いである。卽ち、たとえ解釋上の標準となるものがあったとしてもその利用には自ずから限界があり、そこに附會の入りこむ餘地があるということである。このことは或いは前記の李挺之「變卦反對圖」を用いながらも端的には說き得ぬ「漢上易傳」の彖傳解釋法をみても自明である。[16]

この意味において煩瑣なりと評される「『本義』卦變圖」もその構成を整理し、二　に論じた如き利用をするならば、傳統的卦變の論理に則った彖傳解釋のひとつの標準としての意義を認め得るものと考えるのである。ここに彖傳解釋上、從來一顧だに與えられなかった「『本義』卦變圖」の活性のための論考とする。

注(1)　以下、本稿において引用する「易本義」は、すべて中華民國六十年十一月一日、華聯出版社印行の、影印國子監刊本、田中慶太郎校訂「周易本義」に依據する。

(2)　李挺之「六十四卦相生圖」一篇については、同「變卦反對圖」八篇とともに拙稿「『李圖』攷」（日本中國學會報　第三十八集　所收）で詳述した。

(3) これは主に清儒の卦變を論ずる者の指摘である。主なものを左記する。

○ 今乃據相生圖、以更定其法。煩碎甚於李氏。（胡渭「易圖明辨」卷九）

○ 朱子又推廣之（「相生圖」）、而用王弼之說、名曰卦變。且以己意增益、視李圖而加倍。至作本義、又以二爻相比者而相易、不與卦例相符。（惠棟「易例」上）

○ 朱子卦變圖、與李之才六十四卦相生圖大同。（張惠言「易圖條辨」卦變圖）

なお、顧炎武の弟子潘耒（字は次耕、一六四六～一七〇八）の「遂初堂易論」中に「卦變論」の一條があり、「相生圖」と「卦變圖」とは全く同じ圖であるとの立場のもとに論を展開している。

又、近時、我が國では、戸田豐三郎博士もその著「易經注釋史綱」（昭和四十三年、風間書房發行）六八一～六八三頁において、このことに觸れられている。

(4) 兩者ともに Ⓐ乾・坤の交通による、Ⓑ六子の卦を本卦とする、Ⓒ十消息卦を本卦とする、の三種を卦變の論理的定法とするのであるが、Ⓒによるものが最も多い。これらのことについては、次の拙稿で詳述した。

㋑ 荀爽の卦變說について（日本中國學會報　第三十四集　所收）

㋺ 虞翻の卦變說について（北海道中國哲學會刊「中國哲學」第十三號所收）

(5) これは清儒王懋竑（字は予中、又は與中、書室を白田草堂という。江南寶王の人。一六六八～一七四一）の說であるが、その論旨は大要次の如くである（「白田草堂存稿卷之一」所收『易本義九圖論』並『易本義九圖論後』に據る）。

一 「卦變圖」は朱門後學の者が「易學啓蒙」付載の「三十二圖」に據り私見を加えて作成したものである。

二 「卦變說」を「卦變圖」と照合した際、合致するのは訟・晉二卦のみで他の十七卦は全く合致しない。從って「卦變圖」は謬ったものであり、朱子の自作でないことは明白である。

三 「朱子語類」を檢索するに、卦變の具體例として擧げられているのは訟・賁・无妄・晉の四卦のみであるが、それらはすべて「卦變說」に本づけて述べられている（黃義剛・潘時擧錄）。そのことは朱子直傳の門弟達が「卦變說」を知っていても「卦變圖」は知らなかったということの明證である。それは「本義」の成書が、孝宗の淳熙四年（丁酉）、西紀一一七七年であり、黃・潘二氏の記錄が、光宗の紹熙四年（癸丑）、西紀一一九三年以降と推定されるのであるから、こと「卦變」に關しては當然「本義」の「卦變圖」も「卦變說」とともにとりあげられるべきであるにも拘わらず、一顧だに與えられていないのは不自然である、ということによって、より實證的である。

(6) 卽ち、坤體に本づく一陽の卦は一陽爻の變動にとどまるが、反轉して乾體に本づく五陰の卦は一卦六爻のうち五陰爻までが動くこととなる。この論理に則れば、坤體に本づく二陽の卦は陽の二爻、反轉して乾體に本づく四陰の卦は陰の四爻、坤體に本づく三陽の卦は陽の三爻、反轉して乾體に本づく三陰の卦は陰の三爻が動くこととなる。從ってこれらのことを逆にいえば、乾體に本づく一陰の卦は一陰爻、反轉して坤體に本づく五陽の卦は五陽爻までが、又、乾體に本づく二陰の卦は二陰爻、反轉して坤體に本づく四陽の卦は四陽爻が動くこととなる。もちろん三陰・三陽の卦は、上記した三陽・三陰の卦の表現の逆となるが結果は同じである。

(7) 「三陰三陽之卦」の條には注を施していないが、圖の異なること同樣である。又、「四陰四陽之卦」には「二陰二陽、圖已見前」と注し、「五陰五陽之卦」には「一陰一陽、圖已見前」と注している。

(8) 「相生圖」では六消息卦を基本とするがために、坤體に本づく五陰一陽・四陰二陽・三陰三陽と、乾體に本づく五陽一陰・四陽二陰・三陽三陰の六種の卦に分類するのであるが、「卦變圖」は十消息卦を基本とするがために次の如く十種の卦に分類せざるを得ない。

坤體に本づくもの	本卦	乾體に本づくもの	本卦	「卦變圖」での呼稱	卦數（含本卦）
五陰一陽之卦	復䷗	五陽一陰之卦	姤䷫	一陰一陽之卦	各六・合十二
四陰二陽之卦	臨䷒	四陽二陰之卦	遯䷠	二陰二陽之卦	各十五・合三十
三陰三陽之卦	泰䷊	三陽三陰之卦	否䷋	三陰三陽之卦	各二十・合四十
二陰四陽之卦	大壯䷡	二陽四陰之卦	觀䷓	四陰四陽之卦	各十五・合三十
一陰五陽之卦	夬䷪	一陽五陰之卦	剝䷖	五陰五陽之卦	各六・合十二
				計	各六十二 合一百二十四

(9) (2)に示した拙稿一八四頁の注(12)參照。「相生圖」では本卦兩爻の變動のみであるがために多くとも第五復までである（四陰二陽・四陽二陰）。然るに「卦變圖」では本卦五爻までも變動する卦があるため波及的に第十復にまで及ぶものもある（三陰三陽・四陰四陽）。

(10) 卦變の論の發生と源流とについては、拙稿「卦變の源流について」（北海道中國哲學會刊「中國哲學」第十一號　所收）において詳述した。

(11) 王懋竑の指摘は注(5)に示した「易本義九圖論」においてであり、胡一桂の指摘は「周易大全」卷首に見える「卦變圖」附錄の注においてである。

(12) この卦變說については、既に拙稿「朱子卦變說について」（大阪大學文學部中國哲學研究室刊「中國研究集刊」荒號所收）において詳述した。

(13) 訟の彖傳「剛來りて中を得」を本卦の大壯に本づく由來の卦の巽では解し得ず、又、晉の彖傳「柔進んで上り行く」を本卦の臨に本づく由來の卦の萃では解し得ぬ、の意。詳らかには本文「說・圖對比表」（一三四・一三五頁）を參照のこと。なお、黃宗羲「易學象數論」卷二『卦變』三では、朱子卦變說十九條十九卦の由來の卦二十七卦の他に更に二十九卦を羅列しているが、彖傳のことばと照合すると二十八卦までが合わない。蓋し朱子卦變說を論駁するに急なるがための無用の羅列である。(12)に示した拙稿三三頁の注(12)を參照。

(14) ここに示した六卦は胡一桂・潘耒・邦儒伊藤東涯（一六七〇～一七三六）のそれぞれが指摘しているものである（注(12)の拙稿に詳述した）。

(15) 除乾・坤之外、其爲卦百二十有四、蓋已不勝其煩矣。易之上下往來、皆以一爻升降爲言。既有重出、則每卦必有二來。從其一則必舍其一。以彖傳附會之、有一合必有一不合。（卷二『卦變』三）

(16) (2)に示した拙稿一七九～一八〇頁參照。たとえば解䷧（蹇䷦の反卦）の彖傳「解は西南に利しく、往きて衆を得るなり。」を小成の卦震☳（蹇の內卦艮☶の反）により端的には說き得ず、源の坤☷より說かれねばならぬのがそれである。

卦變圖

朱傳或以卦變爲說。今作此圖以明之。蓋易中之一義。非盡卦作易之本指也。

凡一陰一陽之卦各六。皆自復姤而來。五陰五陽。卦同圖異。

剝　比　謙　師　復

夬　大有　小畜　履　同人　姤

凡二陰二陽之卦各十有五。皆自臨遯而來。四陰四陽。卦同圖異。

頤　屯　震　明夷　臨

蒙　坎　解　升

艮　蹇　小過

晉　萃

觀

大過　鼎　巽　訟　遯

革　離　家人　无妄

兌　睽　中孚

需　大畜

大壯

咸　旅　漸　否

困　未濟　渙

井　蠱

恒

隨　噬嗑　益

既濟　賁

豐

節　損

歸妹

泰

凡三陰三陽之卦各二十。皆自泰否而來。

損　節　歸妹　泰

賁　既濟　豐

噬嗑　隨

益

蠱　井　恒

未濟　困

渙

旅　咸

漸

否

凡四陰四陽之卦各十有五。皆自大壯觀而來。二陰二陽。圖已見前。

大畜　需　大壯

睽　兌

中孚

離　革

家人

无妄

鼎　大過

巽

訟

遯

萃　晉　觀

蹇　艮

小過

坎　蒙

解

升

屯　頤

震

明夷

臨

凡五陰五陽之卦各六。皆自夬剝而來。一陰一陽。圖已見前。

大有　夬

小畜

履

同人

姤

比　剝

豫

謙

師

復

（『易本義』圖一に據る）。